

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19520396
 研究課題名（和文） 正倉院文書訓読による古代言語生活の解明
 研究課題名（英文） A Clarification of Lived-Language in Ancient Japan through *Kundoku* Readings of Shōsōin Documents
 研究代表者
 桑原 祐子（KUWABARA YUKO）
 奈良女子大学・古代学学術研究センター・協力研究員
 研究者番号：90423243

研究成果の概要（和文）：正倉院文書の訓読と注釈という基礎研究を通して、古代日本語の実用世界における言語生活の解明を行った。原本の観察に基づいて、文字の形と語の関係・言葉と事柄との関連を検証し、8 世紀の役人たちが、どのような言葉や表現を生み出していったのかということ具体的を示した。このことによって、これまで国語資料として評価されなかった正倉院文書を、古代の生きた言語生活を解明する国語資料として位置づけることができた。

研究成果の概要（英文）：We have clarified the lived-language of real-life Japanese in the ancient period through fundamental research in the form of *kundoku* (Japanese-style readings of Chinese) and annotations of Shōsōin documents. Based on our observations from these documents, we have inspected the relationship between the form of characters and words and between language and content. We have concretely shown what type of language and expressions eighth-century officials used. Shōsōin documents have never before been examined as linguistic sources. Based on this research, we have been able to focus on Shōsōin documents as linguistic sources that help clarify the lived-language of the ancient period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：国語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：正倉院文書 言語生活 訓読 国語資料 実用世界

1. 研究開始当初の背景

(1) 正倉院文書は、奈良時代最大の第一次資料群であり、これだけ纏まった 8 世紀の伝世文書は世界を見渡しても存在しないといわれてよい。しかし、正倉院文書は、従来日本古代史の史料としてのみ重要視されてきた。国語資料としての評価は低く、きわめて断片的な研究しかなかった。正倉院文書の中では、

きわめて特殊な万葉仮名文書甲種・乙種、部分的に宣命書きの見られる文書、写経所文書の紙背文書（一次文書）として、たまたま残った戸籍・計帳などが研究対象であった。しかし、これらの研究は、正倉院文書全体から見れば、10 パーセントにも及ばない、ごく僅かな資料を対象としたにすぎない。つまり、正倉院文書は、古代日本語の言語研究資料と

して、位置づけがなされているとは言い難い。ここに、正倉院文書全体を国語資料として使うための基礎研究が必要があるのである。

(2) 正倉院文書の中心は、造東大寺司写経所が残した写経所文書である。全体の九割以上を占める。この写経所文書を国語資料として扱うためには、写経所文書の性格・構造・作成過程・処理過程についての認識、及び奈良時代の写経所がどのような機構であったかということの認識が不可欠である。これらについての研究が、古代史の分野でこの20年の間にめざましく進んだ。写真の公開・解原本の接続情報の公開・索引類の整備によって研究環境が整備されたからである。その結果、古代史の分野では、正倉院文書の性格・構造・文書作成過程の解明・写経所や写経事業の枠組みの解明など、正倉院文書研究は一つの到達点にきている。

このような古代史の研究成果を受け、研究の領域は国語学・書道史・仏教史と広がりを見せつつある。写経所文書研究の進展と研究環境の整備は、正倉院文書を国語学的に研究する条件が整ったということである。

(3) そのような中で、桑原祐子(研究代表者)は、正倉院文書の特色を生かしながら、国語学研究を行ってきた。その成果は、平成17年に『正倉院文書の国語学的研究』(思文閣出版)として纏めた。ここでの研究の中心は、文字・表記と語彙の研究であった。次に行うべき研究は、語法の研究であるが、語法研究を行うためには、正倉院文書の一つ一つの文書・帳簿の訓読が不可欠であることを痛感した。また、正倉院文書の訓読は、国語資料として正倉院文書を扱うための基礎研究でもある。

すでに、基礎研究として、奈良女子大学21世紀COEプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」の報告集 vol.4「正倉院文書の訓読と注釈―請暇不参解編(一)」(平成17年12月)・同 vol.9「正倉院文書の訓読と注釈―請暇不参解編(二)」(平成18年3月)を桑原祐子が担当して刊行した。この訓読と注釈の作業の過程で、文字・表記、語彙の研究はもとより、古代日本語書記のための語法研究の可能性をも実感するに至った。

2. 研究の目的

本研究「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」の全体構想は、正倉院文書を国語資料として位置づけることである。そして、古代日本語(8世紀)の実用世界の言語生活を解明することをその目的とする。正倉院文書によって8世紀の言語生活が明らかにされることによって、正倉院文書の国語資料としての位置づけは確固たるものになると考え

る。そのための基礎研究として本研究を行う。正倉院文書の基礎研究は、まず、文書を読解することから始まる。ここでいう読解とは事柄を読み解くのではなく、どのような言葉で事柄が記録され、理解されたかということ、つまり、言葉を読み解くことである。その具体的な基礎作業が「訓読」である。この訓読作業を通して、古代の日常言語生活の解明を行う。正倉院文書によって明らかにされる言語生活とは、歌や文学等の洗練され、装飾された言語生活ではなく、八世紀における生の実用の言語生活である。

従来の国語研究の中心資料は、『万葉集』『古事記』に代表される編纂物であった。歌や文学の言葉の研究は、大いに蓄積されてきた。しかし、その基底には日常の言葉の世界が存在した。つまり、役所で役人達が日々書き記し、読み慣わしている言葉の世界があったはずである。これを知る手掛かりが、生資料である正倉院文書にはある。従って、正倉院文書から抽出される言語の諸相を明らかにすることは、これまで光の当たらなかった上代の日常言語生活の具体的な姿を解明することになり、上代日本語に対する新しい知見を加えることになるのである。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、文書帳簿を表現目的別、表現内容別、表現者別のようにグルーピングし、一点一点を訓読することによって国語資料としての確かな位置づけをしたいと考えている。訓読をするということは、事柄として認識するだけではなく、言葉として認識することである。つまり、記録すべき事柄を、日本語(和語に限定しない)として、どう書き、どう読んだのか、ということ明らかにするというのである。本研究における訓読・注釈作業の特色は二つある。

第一に、一次資料の特色を生かし、原本の写真と広く普及している『大日本古文書』の釈文を並べ、文字の校訂・句読のあり方を再検討したうえで、訓読を試みる点である。写真による原本の観察によって得られる知見は多い。文字の形・筆跡の違い・墨色の違いによって、重層的な文書の成立過程を確認することが可能となる。

第二に、古代という共通点を持ちながら、専門を異にする研究者が同じ資料を検討するという点である。このことによって、事柄と言葉がそれぞれ一人歩きせず、事柄と言葉との関連性を考えながら適切な訓読を試みることができるのである。正倉院文書を扱うためには、写経所の機構・写経のプロセス・写経帳簿の成立とその処理過程の理解が不可欠であるが、従来の国語学研究には、それがかけていた。これを補うことも可能とな

る。以上の作業は次の三人が行った。

Aグループ

国語学専攻の桑原祐子（研究代表者）

日本古代史専攻の黒田洋子（研究分担者）

Bグループ

国文学専攻の中川ゆかり（研究分担者）

（2）Aグループは、個々の文書を表現目的別・表現内容別・事業内容別にグルーピングし、訓読と注釈を行った。特に、正倉院文書の一次資料としての特色を生かし、原本の写真を観察することを中心におき、文字の形と語の関係の検討・重層的な文書の成立過程の確定・関連資料の検討に重きを置いた。具体的な資料と担当者は以下の通りである。

* 「造石山寺所解移牒符案」の訓読と注釈

担当：桑原祐子

* 正倉院文書中の「啓・書状」の訓読と注釈

担当：黒田洋子

（3）Bグループは、正倉院文書読解のための基礎作業である訓読と注釈に基づき、古代日本語の考察を行った。正倉院文書読解のためのキーワードとなる語・語法を選択し、正倉院文書による帰納的考察のみならず、他の上代文献資料や中国資料との比較検討を加えることも行った。

担当：中川ゆかり

4. 研究成果

（1）Aグループの研究成果は、2冊の報告書を刊行することによって、公開した。

①報告書Ⅰ

「正倉院文書の訓読と注釈—造石山寺所解移牒符案（一）—」（研究代表者 桑原祐子執筆）

正倉院文書に残る三種の造営資料の内、詳細な記録・報告の帳簿・文書が最もよく残っているのが、石山寺造営資料である。造石山寺所解移牒符案は、近江石山寺の増改築を担当した造石山寺所および石山写経所が発給した文書を日付順に写し、控としたものである。これによって、造営に関わる、人の動き・物の動き・造営の進捗状況・造営の具体的状況・担当者の仕事ぶりを、日を追って明らかにできる。この資料の訓読と注釈を通して、以下の検討を行った。

* 上位機関に無理な要求を通すときに、どのような表現を選択するのか。

* 相手の非を責めるときに、どのような言い回しをするのか。

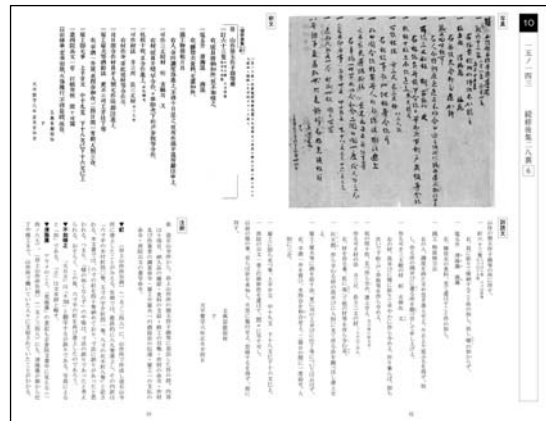
* 奈良時代の実務者の書き誤りや漢文の語法の誤りの背後にある日本語の具体的な姿はどのようなものなのか。

* 他の上代文献では抽出できない建築用語の抽出とその具体的な音形式の検討を行った。

* 古代文書主義の基底となる「実用の日本語」という古代日本語の新たな位相の記述を行った。

50通の文書について、写真・釈文・訓読文を見開き2頁に記載し（図1）、個々の言葉について注釈を付した。注釈では、豊富な関連資料の分析から個々の言葉が使用された具体的状況を明らかにし、帰納的方法で語義を確定した。さらに、踏み込んで検討すべき事項については、補説において論じた。また、造石山寺所解移牒符案の総目録を作成し、検索の便を図るため、総目録をCDにして報告書に添付して公開した。

（図1）



②報告書Ⅱ

「正倉院文書の訓読と注釈—啓・書状—」（研究分担者 黒田洋子執筆）

正倉院文書中の請暇の啓・月借金の啓を除くすべての「啓・書状」の読解作業を行い、注釈を付した。写真・釈文・訓読文・注釈の体裁は、報告書Ⅰと同じである。

まず、啓・書状を内容毎に分類し、分析を行った。分類項目は以下の通りである。

- 1、地方から安都雄足への書状
- 2、經典の請求状
- 3、經典の返却状と送り状
- 4、消息・色々な書状
- 5、物品請求状
- 6、物品進上状
- 7、優婆塞・経生・校生の貢進状・出仕願
- 8、写経・装潢依頼状
- 9、上日・歴名記入依頼状・その他

訓読・注釈の作業の中で、次のことを行った。

* 歴史学の方法を駆使し、個々の書状の関連資料を調べ、書状の背景を押さえた上で、言葉の語義について考察を行った。

* 従来、奈良時代の書状については様式論的研究しかなかったが、言葉の用法の知見によって書状の諸相を考察した。

* これまで言及されることのない書体に着目し、新たな視点を分析に加えた。

* 内容別に分類したことで、各項目の中で共通する特徴を考察した。

158 通の啓・書状の訓読・注釈及び上記の考察を通じて、奈良時代の啓・書状の性格や機能に関する一定の知見を得ることができた。さらに、書き手が官人か僧侶か雑使かによって、書式・用語・書体について、明らかな相違があることも分かった。

(2) Bグループの研究成果は、報告書Ⅲ「正倉院文書からたどる言葉の世界(一)」(研究分担者 中川ゆかり執筆)を刊行することによって、公開した。

報告書Ⅲでは、注釈篇として5通の性格の異なる文書を取り上げ、まず文書をそのものとして読むべく注釈を施し、さらに正倉院文書の特徴づける言葉や物に考察を加えた。その際、報告書Ⅰ・Ⅱと同じく、原本の写真をできるだけ多く掲載し、観察することを心がけた。5通の文書と考察項目を次に挙げる。

- 1、造東大寺司から写経所に物を送る文書
考察Ⅰ経帙 考察Ⅱ相手を指す「彼」
- 2、官人どうしの仕事の手紙
考察Ⅰ「仰」と「抑」—正倉院文書の誤字— 考察Ⅱ「苦し」の語義
- 3、経典を請う文書
考察Ⅰ「御執経」 考察Ⅱ「往々トコロドコロ」
- 4、紛失した経典の探索の文書
考察Ⅰ「請返」 考察Ⅱ「款状」
- 5、経師占部忍男の報告書
考察Ⅰ「上帙」 考察Ⅱ助動詞を表す「在」

- * 正倉院文書は転写の過程を経ない第一文書なので、書写による誤りはないが、書き手自身の誤字は散見する。その誤りを分類し、どのような状況で書き誤るのか、さらに文字をいかに学んだのかを考察した。
- * 奈良時代、仏教が国家的規模で受容されたことは様々な文献によって明らかにされているが、個人の信仰のあり方や仏典の受容のあり方については十分明らかとは言えない。その点について、下道主の手紙から、下級官人の仏教儀式の実践を、写経所の名称から、その主催者たる天皇の信仰のあり方を推測した。
- * 平安時代の用例しか知られていない語義に、正倉院文書を読解することによって、上代の用例を加えることができた。

論考篇として、2つの論考(「セ(女偏に夫)」字考・古事記と正倉院文書—「乞徴」「随～在」「上件・右件」を手がかりに—)を掲載し、正倉院文書による言葉の研究が、他の上代文献の研究にどのように役立つのかということを具体的に明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- ① 桑原祐子、古代官人の言語生活—病氣回復を表す表現—、古代学、査読有、1巻、2009、138—149
- ② 中川ゆかり、「セ(女偏に夫)」字考、萬葉、査読有、203巻、2009、1～17
- ③ 桑原祐子、請暇不参解の表現—桑内真公の請暇解と不参解—、古代文化とその諸相、査読有、Vol.15、2007、201～226、
- ④ 桑原祐子、請暇解の表現をめぐって—桑内真公と丸部大人—、正倉院文書にみる古代日本語、査読有、Vol.11、2007、2—39、

[学会発表](計5件)

- ① 中川ゆかり、水門の景観—「潮」と「湖」と一、風土記研究会、2009年9月5日
- ② 桑原祐子、正倉院文書の国語学的アプローチ、奈良女子大学古代学学術研究センター若手支援プログラム、2009年8月5日、奈良女子大学
- ③ 黒田洋子、情報手段としてみる正倉院文書、奈良女子大学古代学学術研究センター若手支援プログラム、2009年8月5日、奈良女子大学
- ④ 桑原祐子、正倉院文書と墨—韓国と日本の交流—、日本学講演会、2009年3月26日、釜山大学
- ⑤ 黒田洋子、正倉院文書中の二つの手紙—役人の思いやり—、日本学講演会、2009年3月26日、釜山大学

[図書](計1件)

- ① 中川ゆかり、他、おうふう、古事記と正倉院文書—「乞徴」「随～在」「上件・右件」を手がかりに—、記紀・風土記論究、2009、61～89

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桑原 祐子 (KUWABARA YUKO)
奈良女子大学・古代学学術研究センター・協力研究員
研究者番号：90423243

(2) 研究分担者

黒田 洋子 (KURODA YOUKO)
奈良女子大学・古代学学術研究センター・協力研究員
研究者番号：70566322
中川 ゆかり (NAKAGAWA YUKARI)
羽衣国際大学・人間生活学部・教授
研究者番号：30168877

(H20→21：連携研究者)

渡辺 晃宏 (WATANABE AKIHIRO)
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財
研究所・都城発掘調査部・教授
研究者番号：30212319

(H20→21：連携研究者)

宮川 久美 (MIYAGAWA HISAMI)
奈良佐保短期大学・幼児教育科・教授
研究者番号：00132382

(H20→21：連携研究者)